

指示があるまで、このページをよく読んで待ちなさい。指示があるまで、この問題用紙を開いてはいけません。

I 受験に際しての注意

- 1 問題用紙はページ（表紙を除く）から十七ページまでである。
- 2 問題の内容についての質問には、いっさい応じない。それ以外のこと^がらについて尋ねた
いことがあれば、手をあげて監督者に聞くこと。
- 3 監督者の「はじめ」の合図で始め、「やめ」の合図ですぐやめること。
- 4 解答用紙が折れ曲がったり、破れたり、汚れたりした場合には、手をあげて監督者に申し
出ること。

II 解答記入上の注意

- 1 すべてマーク方式で解答を記入すること。
- 2 マークは必ずHBの黒鉛筆を使用して記入すること。ボールペン、万年筆、サインペン等を用いてはいけない。
- 3 答えは、すべて各問題の指示にしたがって解答欄にマークすること。
- 4 一度マークしたものを訂正するときは、プラスチック消しゴムで完全に消してからマークしなおすこと。消して出たカスはきれいに払っておくこと。
- 5 次の場合は、いずれも誤答となるから特に注意すること。
 - (1) マークの仕方が悪かった場合。(特にマーク欄が塗りつぶされていなかったり、外側に少しでもはみ出した場合)
 - (2) 問題が要求している以上に余分な答えをマークした場合。
 - (3) マークすべきところ以外に印をつけたり、汚したりした場合。特に枠内は絶対に汚さないこと。
 - (4) 訂正の場合の消し方が不十分な場合。

Ⅲ 氏名等の記入上の注意

- 1 問題用紙と解答用紙の両方の所定欄に、漢字で氏名を、算用数字で受験番号をそれぞれ記入すること。
- 2 解答用紙の左側にある受験番号をマークすること。

氏 名	
-----	--

受験番号					
------	--	--	--	--	--

一 次の各問いに答えなさい。

問一 漢字の読みの間違っているものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 殊勝（しゅしょう） ② 虚空（きよくう）
③ 如実（によじつ） ④ 市井（しせい）

問二 送り仮名の間違っているものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 慌わただし ② 謝る
③ 忌まわしい ④ 訪れる

問三 カタカナの部分に「飽」の字が当てはまるものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① ホウ仕（ほうし） ② 介ホウ（かいほう）
③ ホウ人（ほうじん） ④ ホウ食（ほうしょく）

問四 「成功をオサめる」の傍線部の漢字として正しいものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 修 ② 押 ③ 治 ④ 収

問五 ☐に入る漢数字が同じものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① ☐差 ② ☐転 ③ ☐喜 ④ ☐日
☐別 ☐倒 ☐憂 ☐秋

問六 「随」の総画数として正しいものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 十画 ② 十一画 ③ 十二画 ④ 十三画

問七 『人間失格』『富嶽百景』を著した作家名として正しいものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 志賀直哉 ② 夏目漱石
③ 芥川龍之介 ④ 太宰治

問八 敬語の使い方として正しいものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① おお客様がお見えになりました。
② おお客様は今すぐこちらにいらっしゃいますか。
③ お分かりにくい点があり、申し訳ございません。
④ この電車には、ご乗車できません。

問九 「物事の仕組み」の意味を持つ外来語として正しいものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① メカニズム ② アウトライン
③ イデオロギー ④ リアリティ

問十 「人に親切にしておけば、いつかは自分に良い報いが来る」という意味のことわざを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 出る杭は打たれる ② 朱に交われば赤くなる
③ 情けは人のためならず ④ 待てば海路の日和あり

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「他人に話せるていどの不幸があったほうがカッコいい……」

期末試験の採点をしていて、ふと手がとまってしまった。答案のなかにこんな一節を見つけたからだ。

不幸にあこがれるということにびっくりしたのではない。不幸が隣りあっていないと幸福も色褪せてみえるというリアルな認識に、ちよつと意表をつかれたのだ。^①

終戦の日、日本という「国」にとつてもつとも過酷であつたその日、朝から空がまっ青に晴れていたこと、そのことがとても不思議な感じがした、と書いた文章を、以前に二、三読んだことがある。運命の重苦しさと澄みきつた空の明るさとのちぐはぐさにとまどつたのは、どうもひとりではなかつたらしい。

わたしたちの存在にはどうもそういうちぐはぐさがつきまとうみたいだ。^③最愛のひとの死にぎわに、にわか便意を催し、辛抱しきれなくなることもあるし、緊迫した戦場にもたいくつな日常はあるし、じぶんの哀しみが他人の悦びと接していることもある。幸福一色の生活なんてありえないし、Aのくりかえしのみで終わる人生などというのもまたありえない。

^④一筋縄でいかない、いや一つの意味が見えてくるとかならず反対の意味も浮上してくるというちぐはぐさ、あるいは滑稽さ、あるいは曖昧さが、どうもわたしたちの現実感の裏張りとなつていようで、非現実的なのはむしろ事態のわかりやすさ、意味の透明さのほうなのだ。

「他人に話せるていどの不幸があつたほうがカッコいい……」

こう語る男子学生はしかし、そのような意味のBさを求めている。輪郭がはっきりしていて、意味がうまくとらえられる光景をじぶんの人生に求めている。

よく似た例を最近、映画でも見た。『家族ゲーム』のあの森田芳光監督の最新作『(ハル)』という映画のなかで、落ち込んだ女性が、パソコン通信をやっている男性とのあいだでかわす、たとえばこんな台詞だ。

「想像の力って、あまりに大きくなるので恐いのです。いま、私パン屋に勤めているのですが、お客さんが〈どんなパンを買うか?〉そんな疑問にすぐ答えが出るのが好きです。〈何個買うか?〉〈どんな言い方で注文するか?〉答えがすぐ出るから好きです」

「いまつきあっている人は」男の匂いというか、色気がない人です(私にとっては)。だから私にはそれが楽なのかもしれません」……。

これらのことばをスクリーン上で読みながらふと思ひ浮かんだのが、「減量」ということばだ。といっても、ダイエットのことではない。むかし作家のオルダス・ハックスリーが『知覚の扉』という、ドラッグ体験を扱った本のなかで書いていた情報の減量のことだ。意識には減量バルブといったものがついていて、あまりにもたくさんの情報をいっぺんに受けとると混乱におちいる。そこで、一種のスクリーニングをおこなって、情報のより分けをする。情報が入ってくる回路をすこし狭めることで、情報の過剰からみずからの神経系を保護し、外界との均衡をたもとうとするのだ。

その意味で、この女性はコミュニケーションのバルブを相当にきつく締めかけている。じかに会って話すよりも、ポケベルや携帯電話の場合のように情報が絞り込まれているほうがラク、という感覚だ。炎天下でサングラスをかけるように、カメラの露出を絞り込むように、情報の入り口を狭めることで、やっとコミュニケーションがなめらかになる、よりナチュラルになる、という感覚だ。

⑥ パソコン通信では、というよりむしろ、情報をぐっと減量したパソコン通信だからこそ、友人や恋人には言えないことが言える。ふだんのデートでは、映画を見ようとか、おいしいもの食べようとか、いいこと、気持ちいいことばかり、あらかじめメニューをこしらえて遊ぶ。たのしいけれどちょっと疲れる。そんなとき、しんどいこと、おもしろくないこと、悩みごとなどを、ハンドル名だけでつながっている匿名の人間に、いろいろとうちあける……。抵抗や齟齬がなく、感情がもつれもせず、不明な点、あいまいな点もない透明なコミュニケーション、そこにこの女性は情報を減量することによって入ろうとしているのだ。

身体から離れてしまったことばの交換。パソコン通信では、だから男か女かってこともあまり意味をもたなくなってくる。「男が女に

なつたぐらいでハルは変わらないことを信じます」

性も減量されるのだ。なんでもあるから、だからこそ決定的なものはない。たぶんそうした現実の、過剰であるがゆえのもどかしさが、減量を要求するのだろう。そう考えると、透明であるということはなめらかではあるが、ちつとも幸福にはみえてこない。^⑦

ここに、〈じぶん〉というもののありかたが、一つみえてくる。じぶんは在るというよりも、I 語りだされるものではないかということだ。じぶんに向かつて、である。

アイデンティティということばがある。「じぶんがじぶんである根拠」とか「自己同一性」、さらには「独自性」などとも訳されることばだ。レインという精神科医は、アイデンティティをつぎのように定義している。

〈アイデンティティ〉とは、それによつて、この時この場所でも、過去でも未来でも、自分が同一人物だと感じるところのものである。それは、それによつて、ひとがそのひとと認められるところのものである。私の見るところでは、多くの人々は、自分たちが、揺りかごから墓場まで、同一の持続的存在であると考えようとする傾向がある。しかも、このような〈アイデンティティ〉は、それが空想であればあるほど、一層後生大事に取つて置かれるのである。

(『自己と他者』、志貴春彦・笠原嘉訳)

II ひととはだれかの子どもとして生まれ、園児になり、生徒になり、会社員になり、父になる……。これら「ひと」をつくりあげているものは、そういう役柄や属性それじたいをとれば、どれ一つそのひとに固有のものはない。これらはわたしが他者を定義づけ、他者がわたしを定義づけるときの材料一式ではあつても、かといつてこれらの総計が〈わたし〉なのでもない。わたしが〈わたし〉になるのは、むしろそれら役柄や属性の断片をつぎあわせて、じぶんというもののイメージを組み立てるなかである。これをレインは、「一

貫して同じ仕方で自分自身をみること」とも表現している。そしてつぎのように言いきる。「自己のアイデンティティとは、自分が何者であるかを、自己に語って聞かせる説話である」と。

このように考えると、先にみた「過剰な合理主義」や「接触回避」などの現象も、じぶんというストーリーを紡ぎだす一つのメソッドだったということになる。他人との関係のなかでじぶんの意味づけが十分に配給されないで、あるいはじぶんと他人がたがいにその意味づけを無効にしあうようなぎくしゃくした関係しか結べていないので、じぶんひとりで明確な物語（レインは「空想のシナリオ」と呼ぶ）を紡ぎだすしかなかったのだ。不自然なまでに輪郭のはっきりした（ということは融通のきかない）物語を、である。

そのためにはしかし、じぶんをさまざまに語りだす、そういう柔らかさがなければならぬ。人生とは、ある意味では、こうした「じぶんに語って聞かせる説話」が自他のあいだでたがいに無効化しあう不協和のなかにあつて何度も何度も破綻する過程であり、またそれをたえず別のしかたで物語りなおすべく試みる過程であるといってもよい。一つの物語しかなければ、それがくずればじぶんも修復不可能になってしまう。

（驚田清一『じぶんに揺さぶりをかける』）

問一 ① 意表をつかれた ④ 一筋縄の意味として最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

① 意表をつかれた

② 弱点をさらされた

③ 欠点を指摘された

④ 決意が周囲にあらわれた

⑤ 予想外のことをされた

④ 一筋縄

① 永遠に続くこと

② 一貫した主張

③ 普通の方法

④ 現実的な解決策

問二 ② 不思議な感じがしたとはどういうことか、説明したものとして最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

① 終戦を望んでいたかのような空の青さに天の潔さを感じ、人知の及ばないものの力の大きさを実感したこと。

② 不幸はいみ嫌うものであるはずなのに、自ら好んで不幸というものを欲しているように、違和感を感じたということ。

③ 紛れもなくつらい状況が目の前にあることと同時に、目の前の景色は自分の心模様とは無関係に広がっていることに戸惑いを覚えたということ。

④ 戦争が終わることにほっとした気持ちがあることを悟られたような後ろめたい気持ちがあり、これからどう生きていくべきかわからなくなったということ。

問三 ③ そういうちぐはぐさがつきまとうみたいだとはどのようなものか、「ちぐはぐさ」を説明したものとして最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

① 楽しみの半分は悲しみでできており、その反対も同様であるということ。

② 幸せを実感するためにはある程度の不幸を受け取れることを覚悟していなければならないということ。

③ 一つの意味が見えてくると反対の意味も現れてくるということ。

④ 現実の世界での苦しみは、空想の喜びで補うものであるということ。

問四 A に当てはまる語として最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

① 不幸

② 不自然

③ 辛抱

④ 抵抗

問五 B に当てはまる語として最も適切なものを次より選び、番号でマークしなさい。

① 滑稽

② 透明

③ 不思議

④ 曖昧

問六 ⑤ 想像の力って、あまりに大きくなるので恐いのですという理由として最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

① 自分の想像力に押しつぶされるから。

② 答え合わせができないから。

③ 入ってくる情報量に負けるから。

④ 一つの答えがすぐに出ないから。

問七^⑥ パソコン通信の特徴を示したものとして間違っているものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 混乱するほどの情報量を持つ。
- ② 透明なコミュニケーション。
- ③ 感情のもつれがない。
- ④ 身体から離れたことばの交換。

問八^⑦ ちつとも幸福にはみえてこないというこの理由として、最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 〈ひと〉は他人との関係の中で物語を紡ぎだすことで意味を持つものであるにもかかわらず、不自然な独りよがりの物語を紡いでいるから。
- ② 不幸を実感しないままに、心地よいと思うことだけを他人と共有することで最上の幸福を味わっていると勘違いしているから。
- ③ 自分が知りたいと思う情報のみを受け取ること、自身の欲望を満足させることに終始し、本当に他人を理解していないことに気づいていないから。
- ④ 求めている情報を求めていた分だけ受け取ることによって理解できる他人を、本質まで理解したと思い込んでいるから。

問九^⑧ 「ひと」をつくりあげているものを説明したものとして間違っているものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 自分の意味づけを周囲の人間に紡いでもらうこと。
- ② 生きていく中で園児、生徒、会社員、父といった役割を持つこと。
- ③ 他人からみた「わたし」のアイデンティティを語られること。

問十 自分自身で自分というもののイメージを組み立てること。選び、番号をマークしなさい。

- | | | |
|-----|------|-----|
| ① | ② | ③ |
| そして | たとえば | つまり |
| ④ | ⑤ | ⑥ |
| しかし | むしろ | さらに |

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

昭和二十三年八月。

ねっとりとした汗が首元から胸板を流れていた。

粘り気のある不快な汗だった。

両肩から掛けた手拭いもう生暖かくなっている。茹^うだるような暑気を感じるのは、風が止まってしまっているせいだけではない。暑さは平気なはずだ。それが先刻から全身がだるくなるような疲労感が襲っている。若い時はこんな感覚はなかった。

仕事の方も、夏場には珍しく、ここ数日、夕刻まで槌^{つち}を打ち続けている。しかしあれしきの仕事量でまいってしまいうやわな身体ではなかったはずだ。

「歳を取ったということか……」

能島^{のうじま}六郎は土間の三和土^{たたく}に腰を下ろして、自分の口から洩^もれたいま^①ましい言葉を吐き出すように息を吹いた。今日の仕事がようやく終わり、彼はいささか疲労感をおぼえていた。やがて、彼は立ち上がると奥の土間へ行き、棚から酒瓶を取り、グラスに酒を注いで一気に飲み干した。腹の底から熱いものがこみあげてくるとようやく汗が勢い良く流れ出した。

彼は空になったグラスにもう一杯酒を注ぎ、それを手に裏庭に出た。まだ空には陽の気配がわずかに残っていた。独り暮らしの老人にとって仕事終わりにこうしてやる一杯が何よりの楽しみだった。洗い場の石の台座に座って、酒を零^{こぼ}さぬようにグラスに口を近づけようとした時、庭の X、朝顔を植えた生垣^{いけがき}の方角から物音がした。彼はグラスから口を離し、音のした方に目をやった。低い垣根戸のむこうに頭だけがのぞいて誰かが立っていた。

「……す、すみません」^②

子供だった。少年か少女かはよくわからない。

子供が苦手だった。所帯を持ったことがないから、子供とどう接してよいのかわからなかった。子供の手にふれようものなら大火傷をしてしまう鍛冶屋^{かじ}に近所の母親も子供を近づけないようにしていたし、夏、冬かまわず上半身裸で仕事をしている仕事場を女、子供が避けるのは当たり前のことだった。その上鍛冶屋は昔から仕事場に女が入ることをいみ嫌った。この地方に残る鉄造りの神である金屋子^{かなやこ}神

は女神なので彼女が女を嫌うという言い伝えがあると親方から聞かされたことがあった。

「誰だ」

彼は野太い声で言った。

木戸がゆつくりと開き、一人の少年が様子をうかがいながら庭に入ってきた。

「何だ」

「お願いがあつてきました」

「わしにか？ ^③ わしは鍛冶屋だぞ」

「はい、知っています。昨日も、今日も一日仕事を見ていました」

そう言えば数日前から表から仕事場をのぞいているちいさな人影があつた。あの人影はこの少年だったのか。

「何の頼みだ」

「あなたの仕事を近くで見させてもらえませんか」

「何のためにだ」

「どんな仕事か見てみたいんです」

^④「見てどうするんだ」

^⑤六郎は自分の意志とは別に少年に対する話し方がぶっきら棒になるのを感じていた。

「……」

少年は臆してしまったのか黙っていた。

「見てどうするというんだ」

知らぬうちに声が大きくなっていた。

少年が六郎の声にあとずさった。顔がこわばっていた。いけないと思った。

「済まん。声が大きいのでは地声だ。おまえを脅かそうと思つてのことではない。わしの仕事を見て^⑥どうするんだ」

六郎はできる限りやさしく訊いた。

「鍛冶屋さんになりたいと思っています」

「……」

一瞬、少年が何を言ったのか六郎にはわからなかった。

「今、何と言った」

「鍛冶屋さんの仕事が好きです。できるならばくは鍛冶屋さんになりたいんです」

「……」

六郎は何と答えてよいものかわからず少年の真意をうかがうように顔を見返した。すでに陽は落ちて周囲は薄暗かったが真剣な少年の表情は六郎にもはっきりと見てとれた。

翌日、朝早くから少年はやってきた。

夏の休みとはいえ、早朝から少年は凜とした顔をしていた。

六郎の鍛冶屋は一人きりの仕事場だったから見学するような場所はなかった。彼は道具棚を奥に寄せ、そこに林檎箱をひとつ置いて少年を座らせた。

⑥ 妙な気分だった。仕事先の人間が仕上り具合を見にくる以外、この鍛冶場に人が入ることはなかった。しかも相手は子供だった。初めのうち六郎は仕事の段取りがぎくしゃくしたが、火をおこし、鋼を入れるとすぐに仕事に没頭した。鍛冶は熱い鋼とむき合う仕事だからいつときでも気がゆるむことは許されない。定められた温度でしか鋼は六郎の言うことをきかない。鍛冶の気持ちが歪めば鋼も歪む。鍛冶の仕事が粗ければ鋼も粗いままになる。

翌日も少年は仕事場にやってきた。

朝の挨拶もきちんとできるし、帰る折も礼をしつかりと言えた。感心な子だ、と思った。

三日目の昼時、六郎は少年に訊いた。

「昼飯は家まで帰って食べているのか」

少年は、近くのパン屋でパンを買って食べている、と返答した。

「家で家族の者が食事の用意をして待つとるんじゃないのか」

「家族は母さんと二人で、母さんは働きに出ていますから……」

「……そうか、なら今日の昼飯はここで食べる」

「いいえ、けっこうです」

「遠慮しないでいい。賄い^{まかな}の婆さんがつくる料理だ。一人分も二人分も同じじゃ」

もう二十年近く六郎の賄い^{しつけ}をしてきているトヨが^⑨丁寧^⑨に挨拶する少年を見て目を丸くした。少年の食事を摂る様子を見ていて、六郎は羨^{うらやま}しい子だ、と思った。

トヨの剥^むいてくれた梨を食べながら六郎は少年と話をした。

「坊は名前は何という」

「由川^{よしかわ}浩太です」

「歳はいくつじゃ」

「十二歳です」

——十二歳か……、わしが親方の下に修行に行ったのは十三歳の時だった……。

山村の農家の六男で生まれた六郎は親方の下に預けられた時、右も左もわからず毎晩泣いていた。そんな自分の子供の時と比べると少年は落着いて見えたし、何かをけなげに耐えているようにさえ思えた。

明日で夏休みが終わるという日、六郎は浩太に初めて鍛冶の仕事を簡単に教えてやった。聡明な少年だった。七日ばかりの見学で浩太は鍛冶の鋼と熱の関係の大半を理解していた。火の中から赤く熱された鋼を出すと浩太が目がかがやかせた。焼付けをくり返してみせると頬を赤く染めて見守っていた。

時折、感嘆したように、ワーツと声を洩らした。その時、六郎は浩太の右目が傷を受けてほとんど見えていないことを知った。

その日の夕刻、六郎は浩太を連れて三業地にある食堂に行った。六郎にすれば、少年が鍛冶屋^⑩になりたいと言い出したのは少年期によくある気まぐれで、汽車を目にすれば機関士になりたいと言うような、たわいもないことだと思っていた。夏休みが終わって学校に通いはじめれば浩太は鍛冶屋のことも自分のことも忘れてしまっただろう。

玉子丼を美味しそうに食べる浩太に六郎は訊いた。

「どうじゃ、鍛冶屋の仕事も毎日見ていると同じことのくり返しでつまらんもんじゃろうが」

「いいえ、鋼は毎日違ってるし、同じものは何ひとつありませんでした。ぼくが思っていたとおり親方の仕事は素晴らしいものです」

浩太は六郎を親方と呼びはじめたのが賄婦のトヨやたまにやってくる客が六郎をそう呼ぶのを聞いたからだった。

「そうか鍛冶屋の仕事は面白かったか」

「面白いのではなく、立派な仕事です」

はつきりした口調で言って浩太は六郎をまぶしそうに見た。

澄んだ瞳で見つめられると六郎は妙な気持ちになった。

「ぼくは中学に行かずに親方のところに行きたいと思います」

「そうか……」

六郎は笑いながらビールを飲み干したが、少年のけなげさに触れる度、胸の中が熱くなっていた。

（伊集院静『親方と神様』）

問一 いまいましいの意味として、最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 不愉快な ② 邪魔な ③ 無駄な ④ 不吉な

問二 X にあてはまるものとして最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 右目 ② 右耳 ③ 右手 ④ 右足

問三 …す、すみませんの心情を説明したものとして最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 六郎と話す心の準備ができていないうちに、自分の姿が六郎に見つかってしまいどぎまぎしている。
② 鍛冶場をのぞいていたことに気付いた六郎が、自分のことをどう思うだろうかと落ち着きを失っている。
③ ただ鍛冶場を見ていたただけなのに、物音を立ててしまったせいで六郎に見つかり戸惑っている。
④ 鍛冶場を見たいという思いから、おそるおそる声をかけたものの六郎と直接会話することに緊張している。

問四 わしは鍛冶屋だぞに表れている六郎の気持ちとして最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 他人の敷地に勝手に入り込んだ上にお願ひまでしてきた少年に驚がくした。
② 突然現れた少年のお願いを鍛冶屋である自分は受けられないと思ひ混乱した。
③ 鍛冶屋である自分に何のお願いがあるか全く見当がつかなかったため動揺した。
④ 見知らぬ少年がまさか自分の職業を知っているとは思わず教えてあげようとした。

問五 見てどうするんだ 見てどうするんだの変化を説明したものとして最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 少年が何度説明しても鍛冶屋の仕事を見学しようとする意図を理解していない。
② 何のための見学がわからなかったが、鍛冶屋に興味があることをわかり始めている。
③ 少年の思ひを疑っていたが、本当に鍛冶屋になりたいのかもしれないと思ひ始めている。
④ はじめは少年の思ひを知りたい一心だったが、少年の反応をみて我に返り言ひ方を変えている。

問六

⑤ 自分の意志とは別に少年に対する話し方がぶつきら棒になるのを感じていたとはどのようなことか。最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 少年への好奇心がわき起こっていたが、会話に慣れておらずそっけない態度をとってしまったということ。
- ② 少年に対し脅かそうと思っていたわけではなかったが、話す気になれず不機嫌になってしまったということ。
- ③ 少年を相手に緊張してしまっていたため、意気地の無さが裏目に出て乱暴な言葉を発してしまっただけだが、無意識の少年の意図をつかめず困惑してただけだが、無意識のうちに追い詰めるような口調になってしまったということ。
- ④ 少年が何を言ったのか六郎にはわからなかったとはどういうことか。最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

問七

⑦ 少年が何を言ったのか六郎にはわからなかったとはどういうことか。最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 少年がよりにもよって大変な苦勞を伴う鍛冶屋になりにいと言うのはおかしいと思ったから。
- ② 少年ははじめ小さい声で話してきたため老人である六郎は聞き取ることが出来なかったから。
- ③ 少年の言葉が本気なのかどうなのかも不確かで返答するための判断がつかなかったから。
- ④ 少年は鍛冶屋のことを何も知らないのにいきなり目指すなんて信じられなかったから。

問八

⑧ 妙な気分を説明したものととして最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 今まで鍛冶場に人が入ることがなかったため、熱意をもって見学する少年に対して拒絶感をぬぐえないでいる。
- ② 少年が本気で鍛冶屋になりたいという思いは分かるが、人に仕事を見られることに慣れておらず戸惑っている。
- ③ そう簡単にできる仕事ではないにも関わらず、本気で鍛冶屋を目指す少年に対して割り切れなさを抱えている。
- ④ 子供は苦手だったが、鍛冶屋に興味をもってくれた少年に早く仕事を教えてあげたいともどかしく思っている。

問九

⑨ 丁寧にあやまる少年を見て目を丸くしたときのトヨの心情として最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 少年の振る舞いに驚嘆している。
- ② 少年の態度の良さに拍子抜けしている。
- ③ 少年の礼儀正しさを絶賛している。
- ④ 少年の分け隔てない接し方に満足している。

問十 鍛冶屋になりたいに對する六郎の考えとして最も適切なものを次より選¹⁰び、番号をマークしなさい。

- ① 機関士になりたいと浩太が考え直せば、鍛冶屋のことや自分のことはすぐに忘れてしまふだろう。
- ② 浩太は鍛冶屋になりたいという思いが気まぐれだと理解していないため、早く気づかせてあげたい。
- ③ 少年期にもつ突発的な願望は、時が経てば忘れてしまうような思慮分別のない憧れにすぎない。
- ④ 他の職業について何も知らないのに、少年期に心を引かれたからといって鍛冶屋を目指すのは安易な考えだ。

問十一 本文に合致しているものとして最も適切なものを次より選¹¹び、番号をマークしなさい。

- ① 六郎は子供が苦手であるものの、鍛冶屋になりたいという浩太に大きな期待を抱いている。
- ② 賢く飲み込みも早い浩太は、六郎の後継者になるために鍛冶屋になりたいとお願いをしにきた。
- ③ 朝の挨拶などきちんと行い、礼をしつかり言うよう努めた浩太を六郎は認めずにいられなかった。
- ④ 少年の熱意は一時的なものだと思いつつ、浩太の憧れの気持ちを目の当たりにし懷疑心がゆらいでいる。

四 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

今は昔、京に極めて身貧しき生者^{※なまもの}ありけり。相知りたる人もなく、父母・類親もなく、行き宿る所もなかりければ、人のもとに寄りて使はれけれども、それもいささかなる覚えもなかりければ、もしよろしき所々もあると、所々に寄りけれども、ただ同じやうにのみありければ、宮仕へをもえせで、すべきやうもなくてありけるに、その妻年若くしてかたち・ありさまよろしくて、心風流^{ふりゅう}なりければ、この貧しき夫に従ひてありけるほどに、夫よろづに思ひわづらひて、妻に語らひけるやう、「世にあらむ限りは、かくてもろともにこそは思ひつるに、日に添へては貧しさのみ増さるは、もし共にあるが悪しきかと、各々試みむと思ふを、いかに」と言ひければ、妻、「我はさらにさも思はず。ただ前の世の報なれば、互ひに飢ゑ死なむことを期すべしと思ひつれども、それに、かく言ふかひなくのみあれば、まことに共にあるが悪しきかと、別れても試みよかし」と言ひければ、男、「げに」と思ひて、互ひに言ひ契りて、泣く泣く別れにけり。

（『今昔物語集』）

※生者……身分の低い者

※試みよかし……ためしてみましよう

※げに……その通りだ

問一 いささかなる覚え 言ふかひなくの現代語訳として最も適切なものを次より選び、それぞれ番号をマークしなさい。

① いささかなる覚え

- ① ほんの少しの記憶に残っていること
② 目をつけられて嫌な思いをしたこと
③ 忘れられない思い出に残っていること
④ わずかばかり目にかけられること

⑥ 言ふかひなく

- ① 言っても仕方がない
② 言葉に表せない
③ 言い逃れできない
④ 文句も言えない

問二 かくてもろともにこそは思ひつるには夫のどのような気持ちが表れているか、最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 自分の納得のいく人生を送りたいと思う気持ち。
② 病気の自分と一緒にいる妻を心配する気持ち。
③ 何をして上手くないかな人生を嘆く気持ち。
④ 妻と一緒にいたいと思う気持ち。

問三 悪しきの品詞として最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 形容詞 ② 動詞 ③ 形容動詞 ④ 名詞

問四 いかの後に省略されている語として最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① ある ② 語る ③ 思ふ ④ 試む

問五 さらにさと思はずの「さ」の指す内容として最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 貧しい生活が続くのは前世からの運命ということ。
② 貧しさから逃れられないのはお互いを思う気持ちがないのが悪いのだということ。

③ 日がたつにつれて貧しさが増すのは一緒にいるのが悪いのだということ。

④ このまま一緒に生活していれば貧しさが改善されるといふこと。

問六 本文の内容と合致するものとして、最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 京に住む貧しい男には若く美しい妻がいたが、男は妻を思って別れることを決意した。
② 京に住む貧しい男は苦しい生活から逃れるため、妻の美貌を利用しようと離婚の提案をした。
③ 妻は夫の提案に納得がいかなかったが、夫の強い思いに負けて別れることを決意した。
④ 妻は貧しい生活に我慢していたので、夫の提案を受け入れて別れることを決意した。

問七 『今昔物語集』と同じジャンルの作品として適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 枕草子 ② 宇治拾遺物語
③ 源氏物語 ④ 平家物語

